

[研究ノート]

観光対象化される都市の近代文化遺産 —神戸の北野異人館を事例として—

堀野 正人

1. 問題意識と考察対象
2. 交錯する伝統的建造物／観光対象の文脈
3. 北野異人館にみる観光対象化の諸相
4. 若干の考察

1. 問題意識と考察対象

都市の近代化の過程で形成された建築や構造物等の文化遺産を保存活用する例が増えてきている。たとえば、小樽の運河保存、横浜の赤レンガ倉庫再生、門司港レトロ事業のように、建造物の内部を改修して飲食店、ショッピング施設、資料展示室、ギャラリーなどに活用するものである。また、建造物は単体としてだけでなく、街並み景観を構成する建造物群として評価されることも多い。神戸にある旧居留地の近代建築や北野の異人館もその事例といえる。これら都市の近代文化遺産の多くは観光の対象となる性格をもっており、多少なりとも当該施設と周辺地域の観光地化に結びつく。先に上げた事例はいずれも観光スポットとして注目を集めている。

都市において希少となった近代の建造物群を文化遺産として保存することと、それらの観光対象としての活用はどのような関係にあるのだろうか。もともと異なる文脈にある二つのまなざしが、同一の対象に注がれるとき、そこに矛盾や齟齬は生じないのか、あるいは、価値基準の位相の違いが生み出すものは何なのか。こうした問題意識に基づいて、神戸の北野異人館を事例として具体的に検証を試み、若干の考察を加えることがこのノートの目的である。今や全国的な観光スポットとして知られる北野異人館街は、同時に伝統的建造物群保存地区等に指定される地域でもある。異人館の二つの顔はどのように重なり合い、ずれているのだろうか。

それを考えるためには、文化遺産化と観光対象化の際の原理を措定しておく必要があるだろう。荻野は、モノを永久に保存しようとする博物館学的欲望の特徴は、それがあくまで「本物」を探し求めるという点にあると指摘する。そして、あるモノが本物であるためには、まず、その「出生」もしくは「起源」が証されなければならない、そこに専門家が登場し、あるモノの起源の正統性を鑑定する必要があるという。これに付言するならば、本物であることは、国宝、世界遺産などの法制度的な確証を得ることで権威づけられ、より堅固なものとなるといえよう。また荻野によれば、本物が文化遺産としての価値をもつためには、出生や起源の証明だけでは十分ではない。つまり、そのモノが希少であり、できれば他にはない唯一無二のもので、しかも再び、それを生み出すことがきわめて難しいものであること、そして、それ自体がレファレンス（参照の対象）になりうるものでなければならない〔荻野2002：9〕。

後者の希少性や唯一無二といった性格は、そのまま観光対象の性格としても通用する。アーリは、観光の対象は非日常的で愉快的体験を誘発するある種の要素を内包しているものであるとし、その例として、対象が唯一無二のものであること、有名性や聖地性をもっていること、特殊な記号性を帯びていることなどを挙げている〔アーリ1995：21-23〕。したがって、あるモノが文化遺産にとって必要条件となる本物性には欠け

ていても、何らかの非日常的な誘引力さえもっていれば観光対象としては成立しうる。たとえば、ディズニーランドのような超人工的なアトラクションや、道頓堀のようなパスティーシュやレプリカで埋め尽くされた街並みの空間も明らかに観光対象となっている。

「本物」であることは文化遺産としての必要条件であり、その成否は文化遺産となりうる対象物の持ち主や保存会等の担い手、地方行政、そして本物の価値判断に深くかかわる専門家たちにとって重大な問題である。一方、観光対象の成立にとっては本物性は十分条件でしかない。むしろ、本物性ありとされることを否定あるいは排除するわけではないし、また、本物性を志向する観光者が存在してもよい。しかし、むしろ観光対象としての成立にとって重要な役割を果たすのは、観光者の知覚形成に深く影響するマスメディアや観光産業であり、それらが構成する一連のシステムのなかで形成されるイメージによって、対象が魅力ある何ものかとして認知されることである。

さて、このような原理的な枠組を措定した上で、具体的に北野異人館の実態を捉えてみたいのだが、まず、異人館が文化遺産および観光対象として形成されてきた経緯をさらっておこう（以下の記述は基本的に神戸市教育委員会編 2000『異人館のある街並み 北野・山本』に依拠している）。神戸を代表する観光スポットである北野異人館を文化遺産としてみるならば、文化財保護法に規定される重要伝統的建造物群保存地区（以下では伝建地区と略す）と、神戸市がそれを含んで指定した都市景観形成地域のなかにある、主に公開されている西洋館を指すことになるのだが、それらの形成には近代以降の歴史的な背景が存在する。

1868(慶応3)年の兵庫開港後、政府は外国人居留地を設置するが、開港直前の政情不穏からその整備が遅れ、北野村など生田川から宇治川の間9ヵ村を、外国人が日本人に混在して住むことを認めた「雑居地」に指定する。現在の北野・山本地区の形成はここに端を発し、働く場の居留地に対して住宅地としての発展を遂げる。いわゆる異人館と呼ばれる外国人住宅の建設は、明治20年代後半より増え、日本家屋と混在しながら第2次世界大戦後にまで及んだ。

昭和30年代のホテル建設、40年代のマンション建設のブームを経て、50年代にはいると良好な住宅地環境を背景にブティックや飲食店などの専門店が立地しはじめ、都心の三宮とは趣を異にする商業地としての性格を帯びるようになる。また、異国情緒あふれる住宅地にファッショナブルなイメージが加わったことから観光地としての性格も強まり、1977(昭和52)年にNHKの連続テレビドラマ「風見鶏」が放映されたこともあって、以後、年間150万人を超える観光者が訪れるまでになる。

雑居地を基に発展してきたことから、この地区には異人館と和風住宅が坂の町に混在する独特の街並みが形成され、わが国近代以降の住宅の変遷過程がよくうかがえる。伝統的な住宅は概して広い敷地の中に建ち、南側に庭をとっているものが多い。道路は一般に狭隘で、塀、石垣、庭木などの向こう側に見える洋風・和風の家並みが景観を構成している。しかし、昭和30年代以降、住宅を取り壊して建設されたマンションや商業・業務建築の中には、それまでの景観の連続性を阻害するものも目立ちはじめた。

そこで、神戸市では地区の歴史的環境を保全・育成するために、1979(昭和54)年、都市景観形成地域を、さらに同年、この中で異人館などの伝統的建造物が集中する範囲を伝統的建造物群保存地区に指定し、翌1980年には重要伝統的建造物群保存地区の選定を国から受けている。これらの区域が含まれる北野町1～4丁目および山本通1～3丁目の範囲を、一般に北野・山本地区という。

阪神淡路大震災では、北野・山本地区も被害を受けたが、他の市街地に比べて倒壊した建造物は少なかった。しかし、大震災を挟んで観光者の入込み数は減少し、壊れた異人館の補修や全壊した建物の復元などが行われたものの、依然として震災前の水準を回復するには至っていない（しかも震災以降の増加分は異人館街からは離れたところにある、1931年に建てられた小学校を再生活用した「北野工房のまち」という観光アトラクションの新設によるところが大きい）〔神戸市教育委員会編 2000：76-80〕。

以上の記述からもわかるように、伝建地区の成立とその後の推移は、実際には観光との関係を抜きにしては語れない。観光の隆盛は北野異人館を歴史的な街並みとして全国的に知らしめることになり、多くの人々がここを訪れ、目にする機会を生み出してきたが、他方、観光によるゴミ、騒音、看板等のいわゆる観光公害をいかにして減らし、独自の街並み景観や雰囲気を保つかという視点から伝統的建造物と周辺環境の保存・保全が地域の課題として持ち上がってきたのである。

2. 交錯する伝統的建造物／観光対象の文脈

北野異人館は、保存すべき文化遺産の一種である伝統的建造物と、非日常的な愉しみのための観光対象という異なる意味を同時に体現している。この二つの文脈の交錯するなかに異人館は存在し、両者の重なり合いと同時に乖離や背反をとめないながら、単なる物理的実在としての建造物としてではなく、ひとつの社会的関係として構築され続けている。ここでは、異人館の表象をいくつかのテキストを通じて垣間見ることで、交錯する文脈の様相の一端を浮かび上がらせてみたい。

伝統的建造物と観光対象の違いはどこに現われるのだろうか。その表象の端的な相違は、建物の呼び名にあらう。表-1は北野異人館を解説した四つのテキストから、各建築の名称を拾い出して対照したものである。表-1の①『異人館のある町 北野・山本』は先にも引用したように、この地域の重要伝統的建造物群保存地区指定20周年を記念して、2000年に神戸市教育委員会が編集・発行したものである。一方、④『マップルマガジン 神戸』(2004)は現在の典型的な観光ガイドブックの一つと言ってよいであろう。まず、この二つの文献の記述を対照しつつ考えてみたい。

二つの文献は、ともに同じ建造物(伝統的建造物のうち公開されているもの)を対象として写真や絵を交えて解説を加えているのだが、その表象の仕方や内容にはいくつかのずれが存在している¹⁾。①では、文化財保存の立場から北野・山本地区で伝統的建造物(①の欄のA)の指定を受けている34の建造物について解説がなされている。それらの名称は、「旧アポイ邸」、「シュウエケ邸」のように、基本的に「(旧)～邸」という形で過去のまたは現在の居住者によって呼ばれる。現在の通称、つまり観光上の呼び名がある場合には、「旧フデセック邸(英国館)」、「旧トーマス邸(風見鶏の館)」といった具合に、それらは括弧書きで併記されている。居住者にしがた命名の意図には、住居としての建造物を表明することがあるだろう。建築についてのコメントは、その年代、構造、様式、素材、間取りなどの特徴で尽くされる。これは保存対象リストがもつべき基礎的な情報としての性格からすれば当然のこととも言えるのだが、そうした視点の置き方も観光の視点との対照を通じて相対化してみると、異なった様相を呈してくる。

建物に対するこれらの解説は、いわば文化財としての語りを示しているのであり、先に述べた希少価値と専門家の認定という特定の価値観の表明でもある。このことは伝統的建造物の写真の撮り方にも反映している。同書には、指定された一軒一軒の建造物の写真が収められているし、街並みを遠景から撮影したものも数多く掲載されている。興味深いことに、いずれの写真も家の前や通りには人影は皆無に近く、街並みを俯瞰した広範囲にわたる遠景写真に数人を認めるだけである。また、観光向けに設えられた内部のレストラン、カフェ、グッズ、アトラクションなどを写し撮ることはない。そこには、賑わいをみせる異人館の日常的な姿を避けて建造物のみを写し、記録しようとする視線がみてとれる²⁾。建造物保存の資料的意味をもつ写真であれば、余計な人影や車などの物の姿が入ることは不都合であろう。しかし、建物は、それが伝統的建造物であろうとも、地元の人々の日常の生活や、外部から訪れる観光者とのかかわりのなかに存在している。そうした社会的な諸々の関係性を捨象し、保存すべき対象として建物を捉える視線は、そこに歴史的な文化財としての価値を見出し、建物自体に本物性を認めるという、ひとつのものの見方にほかならない。と同時にそれは、文化財保護法によって制度的に形成された視線でもあろう。

表-1 北野異人館の名称の比較

①『異人館のある街並み 北野・山本』(2000)	②『神戸異人館』(1977)	③『たびんぐ神戸・大阪』 (1991)	④『マップルマガジン 神戸』 (2004)
A 旧アボイ邸	板べい (アーボイ邸)		イタリア館 (プラトン装飾美術館)
B うろこの家 ・うろこの家美術館	うろこの館	うろこの家	うろこの家・うろこ美術館
A 旧フデセック邸 (英国館)			英国館 (旧フデセック邸)
A ヴォルヒン邸		香りの家オランダ館 (旧オランダ総領事邸)	香りの家オランダ館 (旧オランダ総領事邸)
A 旧トーマス邸 (風見鶏の館)	旧クリスタル・トーマス邸	風見鶏の館 (旧トーマス邸)	風見鶏の館 (旧トーマス邸)
B 北野外国人倶楽部 (旧明治館)		明治館 (旧ライオンハウス3号棟)	北野外国人倶楽部 (旧フリーユガ邸)
B 旧中国領事館 (旧OCTOBER 14)		OCTOBER 14	旧中国領事館 (旧チン邸)
A ヒルトン邸 (旧パナマ領事館)		ハリウッドスターウェイ (旧パナマ領事館)	旧パナマ領事館 (旧ヒルトン邸)
A 旧アメリカ領事館官舎 (ホワイトハウス)		ホワイトハウス (旧アメリカ領事館官舎)	神戸北野美術館
A シュウエケ邸	旧A・N・ハンセル邸 (現E・J・シュエケ邸)	シュウエケ邸 (旧A・N・ハンセル邸)	シュウエケ邸 (旧A・N・ハンセル邸)
A パラスティン邸			パラスティン邸
A 旧榊田・橘邸 (洋館長屋)	洋館長屋	洋館長屋	仏蘭西館 (洋館長屋)
A 旧フェレ邸 (ベンの家)		ベンの家	ベンの家 (旧ベン・アリソン邸)
A 小林家住宅 (萌黄の館)	旧メリア ・トレイド・シャープ邸 (現・小林邸)	萌黄の館 (旧シャープ邸、白い異人館)	萌黄の館 (旧ハンター・シャープ邸)
A 旧ドレウエル邸 (ラインの館)		ラインの館 (旧ドレウエル邸)	ラインの館 (旧ドレウエル邸)
		山手八番館	山手八番館 (旧サンセン邸)
		北野異人館本家オランダ館 (旧チャーリー・エリオン邸)	本家オランダ館 (旧エリオン邸)
		ハニーベアワンダーランド	ザ・テディベアミュージアム (旧シャラフディン邸) ※アメリカンハウスを統合リ ニューアル
		アメリカンハウス (旧ハムウェイ邸)	北野物語館
	旧ビショップ邸 (現・東天閣)		東天閣 (旧ビショップ邸)
A 旧スタデニック邸	旧スタデニック邸	ハイジホフ (旧スタドニック邸)	
A バジャージ邸		ベルシャ館	
A 旧グラシアニ邸 (グラシアニ)	R・I・グラシアニ邸	グラシアニ	
A ボリビア領事館	ボリビア共和国領事館	ボリビア共和国総領事館	
A 神戸華僑総会	旧ゲンセン邸 (現・神戸華僑総会)	華僑総会	
A チャン邸 (サッスーン邸)	D・サッスーン邸		旧サッスーン邸

A	門邸	旧P・A・ディスレフセン邸 (現・門兆鴻邸)		
A	キャセリン・アンダーセン邸	キャサリン・アンダーセン邸		キャセリンアンダーセン邸
A	ムーア邸	旧ドレウエル邸 (現・オーバーライン邸)		
B		展望塔の館	展望塔の家	展望塔の家
A	レイン邸			
A	旧トーセン邸			
A	山田邸			
A	片桐・山本邸			
A	マリニスタレフ邸			
A	丹生邸			
A	鄭邸			
A	寺西邸			
A	高木・渋谷邸			
A	上久保邸			
A	モッシュ邸西棟			
A	モッシュ邸東棟			

注記)

・ 出典は以下の文献。

①神戸市教育委員会編2000『異人館のある街並み 北野・山本』神戸市教育委員会

②広瀬安美 1977『神戸異人館』保育社

③あるつく社編集部 1991『たびんぐ神戸・大阪』山と溪谷社

④らいむず企画 2004『マップルマガジン 神戸』昭文社

・ 異人館の名称のうち、ゴシック体は各館の説明文のタイトル、明朝体は説明文内および地図上の記述。

・ 太線内は2000年時点での公開異人館(飲食店含む)、それ以外は非公開の異人館。

・ Aは伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物(洋風建築物)、Bは都市景観形成地域内の重要な伝統的洋風建築物。

・ ③『たびんぐ神戸・大阪』に掲載された公開異人館の活用内容(④『マップルマガジン 神戸』に掲載された公開異人館の活用内容については表-2を参照されたい)。

OCTOBER 14:カナダの食材を使ったシーフードレストラン。

ハリウッドスターウェイ:ハリウッド映画の名作ポスターを展示。

ホワイトハウス:ギャラリー、喫茶室。神戸ゆかりの洋画家の作品を展示。

ハイジホフ:アルプス山中の家を再現。ガイドの女性もスイスの民族衣装。

ペルシャ館:カーペット、ガラス器、壺などペルシャの古美術品を展示。

一方の観光の視点から、異人館はテキストの中にどのように表象されているのだろうか。ここでは呼び名の点に絞って考えてみたい。表-1の③は『たびんぐ神戸・大阪』(1991)、④は前出の『マップルマガジン神戸』(2004)で、いずれも観光ガイドブックである。これらに表れる名前は、いわゆる公開異人館として認知されている観光上の呼び名である。たとえば、「旧アボイ邸」ではなく「イタリア館(プラトン装飾美術館)」として、「ヴォルヒン邸」ではなく「香りの家オランダ館」として記述される。ただし、ガイドブックに記載される多くの公開異人館の場合、観光の領域で用いられる通称だけでなく、伝統的建造物の「旧〜邸」の呼び名が本文の説明のなかに、ある程度加えられている。したがって、①と④を比較するとよくわかるのだが、「旧フデセック邸(英国館)」と「英国館(旧フデセック邸)」、あるいは「旧トーマス邸(風見鶏の館)」と「風見鶏の館(旧トーマス邸)」というように、伝統的建造物としての名称と観光対象としての名称は、表裏の対称的な関係になって現れている。

また、写真の撮り方の点で比較してみると、たしかにガイドブックにおいても、建造物の外観の写真では人の姿をみることは少ない。しかし、①と比較すれば、建物の前に観光者を配し、いわゆる情景を作り出すとする意図もうかがえる。同様に、北野通りや路地の坂道の写真では歩く人の姿を取り込んで、観光者が街並みを探訪する雰囲気を与えようとしている。①では、建造物の全景を枠取りの中に収めようとするのに対して、④では、入り口を中心に部分的に撮られることが多く、シンボリックな窓や塔に照準を合わせるなど多分に演出的である。さらに、異人館の中の展示物や、レストラン、ショップなどの観光情報を伝えるために、建造物内部の写真が多用されている。

①と④のもう一つの大きな違いは次の点にある。①の記述の根底にある伝建地区および景観形成地域という制度は、指定を受けた伝統的な建造物が公開か非公開かを問わず、両者が保存されることで全体として街並みが形成、維持されることを目的としている。一方④は、基本的に公開の異人館を対象としてリストアップし、そこでの土産、飲食、アトラクションを込みにして異人館を観光対象化している。逆に言えば非公開の異人館には観光的価値を見出しにくいわけで、地図中に名前が若干見られるだけである。

ところで、ガイドブックであっても、観光に傾斜した枠組みで記述されるとは限らない。たとえば、表-1の②『神戸異人館』(1977)は、内容的には後に指定された伝建地区を中心に、北野・山本地区の洋風建築物を写真、挿絵とともに解説したものである。記述の大半は建物の特徴に割かれ、随所で歴史的建造物の保存の重要性が説かれる。すでに取り壊された建物のスケッチを入れるなど、筆者の街並みへの思い入れの強さが表れている。同書は旅行ガイドの体裁をとるものの、観光よりは伝統的な建築という視線と価値観で書かれており、保存の経緯を編纂した①の『異人館のある町 北野・山本』に近い視点から語っている。現在でもこうした視点から、建造物の歴史性や希少な文化財という本物性を志向して書かれたガイドブックがないわけではない。たとえば、『上撰の旅 神戸』(2003)では4頁にわたって、北野異人館の成り立ち、建築様式の特徴、重要伝統的建造物群保存地区の選定などについて解説している。また、実際に異人館に住んでいたA.N.ハンセルやE.H.ハンターのような建築家や実業家を取り上げている。しかし、街並みのいわれや伝建地区について、このように紙幅を割くガイドブックは少なく、ごく簡単にふれる程度のもので主流である。ここでは、北野は「しゃれた意匠の異人館」が残り、「エキゾチックな風情溢れる観光名所」であり、また異人館通り(山本通り)周辺の「女性好みのカフェや雑貨店」や「洒落たブティックやショップ」と一体化されて描かれることも多い[たとえば『ブルーガイドニッポン 神戸・淡路島』2002]。そこから、少なくともマスメディアの視線が、建築の伝統そのものよりも、瀟洒な洋館に漂う異国情緒やレトロなイメージと、ショッピング、料理等が結びついて生まれる魅力に向けられ、誌面構成の基調もそうした観光地としての街並みの描き方に据えられているといえよう。また、②の文献が1977年の発行であることから考えると、その後観光地としての北野異人館の評価が定着するにつれ、むしろ伝統的建造物としての異人館というまなざし

が相対的に弱まってきたと推測することも可能であろう。

このように北野異人館の一带は、伝建地区の指定を受けているにもかかわらず、現在そのことに詳しく触れているガイドブックは少ない。文化財としての、あるいは学術的な意味合いでの歴史的建造物ではなく、主に西洋のエキゾシズムを喚起する素材としての建造物群こそが観光の主な対象である³⁾。たとえば1991年発行の③の『たびんぐ神戸・大阪』では、②の『神戸異人館』の視線はなく、④の『マップルマガジン神戸』とほぼ同様のものになっている。そこで興味深いのは、後述するように万博のパピリオンを髣髴とさせるネーミングや施設の内容がみてとれることである(表-1注記参照)。③と④では13年の時間が経っており、公開異人館を活用した店や施設の変化はかなり大きい。ただし、その間、ハリウッドスターウェイ、ホワイトハウス、ハイジホフ、ペルシャ館といった名称は消えるものの、新たに仏蘭西館、イタリア館、ザ・テディベアミュージアムが登場しているように、日本人にとって主に欧米をイメージさせる典型的な記号を用いる傾向は現在も引き継がれている。

以上、数点のテキストを見る限りではあるが、北野・山本地区の伝建という文化遺産の文脈と、いわゆる北野異人館という観光対象の文脈は、同一の建造物群をまなざし、一見すると重なっているのだが、その表象の内実には諸々のずれを見出すことができそうである。では、観光対象として北野異人館の実際を捉えたとき、そこにはどのような特徴が見出せるのだろうか。また、文化遺産としての伝建の意味づけは、観光対象化とどのようにかかわっているのだろうか。そのことを次にみていこう。

3. 北野異人館にみる観光対象化の諸相

神戸では、開港以降の都市の生成と発展という近代の歴史的背景を抜きにして観光が成立しえないことは明らかである。ここでは、北野異人館という近代に形成された建造物が実在していることによって、観光が成立するということである。そして、建造物群は文化遺産化されること(伝建という文化財になること)によって独自の本物性や希少価値を制度的に保証されることにもなった。1節で述べたように、観光はこの本物の存在を否定しないし、ある観光者群の志向は本物を追求する文化遺産の文脈やまなざしと親和的である。しかし、同時に観光の当事者たち(とくに産業)は、本物から派生するイメージや記号をつかみ出し、商品化し、メディアに載せていくことで、歴史的街並みを観光地へと作りかえていく。観光者たちも「偽物」を許容し、あるいは、観光の本質は「演出」であると割り切って好んでそれに接近しようとさえする。このように観光対象の文脈は、文化遺産の文脈と共振しつつも、背反するような性格をもっている。より正確に言えば、文化遺産に乗っかりながら、似て非なる文化を創り出しているのが観光なのだといえるだろう。北野異人館でのそうした文化の状況を、ここでは脱分化と記号消費という視点からみていくことにしよう。

アーリは観光における文化の変容をポストモダンの様相として捉え、説明している。そこで強調されるのは二つの脱分化の傾向である[アーリ1995:146-156]。一つは、ハイカルチャーとポピュラーカルチャーの、あるいは権威づけられた文化と庶民的な文化といった、文化に関する垂直的な境界の溶解すなわち脱分化である。こうした傾向は、観光の空間としての北野異人館にもみてとれよう。

異人館街では、文化財として認められた伝統的建造物すなわち「本物」と、観光用に新たに設えられた「作り物(偽物)」とが混在しつつ、同列的に扱われ、観光のまなざしの対象となっている。後者のもっとも顕著な例は「ウィーン・オーストリアの家」「デンマーク館」であろう。この二つの建物はもともと異人館の立地していた場所に1992年に建てられた。館の中身はそれぞれの国を紹介するアトラクションだが、コロニアルスタイルに代表される異人館の外観はとっておらず、新たにデザインされたものである(オーストリアの家はワインの造り酒屋であるホイリゲをイメージしている)⁴⁾。二つの建物は、神戸市の伝統的建造物に認定されている旧オランダ総領事邸の「香りの家オランダ館」と隣接している。これら三館は共同で経営され

ており、割引入館券が発行されている。「ウィーン・オーストリアの家」および「デンマーク館」は、形状は異人館とは異質の建物でありながら、ガイドブックのなかでは北野公開異人館と並べて紹介され、同列に扱われてさえいる(表-2参照)。

もう一つの脱分化は、建築、学問、美術、教育、商業等の異なる諸領域の境界が不鮮明になり、相互に浸透しあい、融解していくという水平的な脱分化である。北野の各異人館の多用な活用方法にこうした傾向をみることができるだろう。その内容を類型化してみると次のようになる。

- ・執務室、客間、キッチン、寝室等の部屋の公開
- ・アンティークな家具、調度品などの展示
- ・絵画、彫刻等の美術品、有名作家の美術作品の展示
- ・その国の歴史・文化などを紹介する展示
- ・異人館の保存に関する資料展示
- ・パーティースペースのレンタル
- ・民族衣装・ウエディングドレスの試着体験、記念撮影
- ・カフェ、レストラン、バー等の飲食施設
- ・グッズショップ

これらのいずれかひとつ、あるいは複数の組み合わせによって館の利用がなされている。多くの異人館が、展示、グッズ販売、飲食、娯楽等の機能のいくつかを兼ねる。しかも、そこでは複数の領域の相互の境界が曖昧になっている。たとえば、「イタリア館(プラトン装飾美術館)」では、絵画や家具のコレクションが展示された部屋がレンタルスペースとなり、「英国館」のバーは昼間は公開されるだけだが、夜になると実際に営業される。

観光上のショッピングは単なる買い物ではなく、それ自体が非日常の場における娯楽的な体験となっているし、異人館でのショッピングについても同様のことが言える。さらに、複雑な演出を凝らし、観光者が参加できるようにしたアトラクションもみられる。「香りの家オランダ館」では民族衣装を着た女性スタッフがオリジナル香水を制作し、販売しているが、観光者はアンケートに答えることで、複数の香水を配合された自分だけの香水を手にすることができる。

さて、ポストモダンの文化的特徴をもつ観光対象としての北野異人館のありようは、同時に“外国”“レトロ”“おしゃれ”といった記号の消費の場としての性格を際立たせたものとなっている。それぞれの異人館の中でも、エキゾチックな「西洋」を体験させるアトラクションがある。たとえば、「北野外国人倶楽部」では、ドレスを試着して敷地内のミニチャペルで記念撮影ができるし、「本家オランダ館」ではオランダ民族衣装が無料体験できるほか、有料でウエディングドレスを貸し出している。「英国館」では、マントを羽織ってリムジンの前で記念撮影ができる。また、「イタリア館」では執事スタイルのガイドが館内を案内してくれる。これは、かつては執事が仕えていたような領事、貿易商といった豊かな階層の住むお屋敷のイメージから展開された演出といえるだろう。表-2は北野異人館として紹介されている施設の概要を一覧したものであるが、総じて観光を意識した演出志向となっている。たしかに、各館の展示をみると、かつての利用者にちなんでいるものの、建物が使用された個別の歴史的事情に基づくものは少ない。実際、北野異人館の内部の展示を観察していると、外国の領事や商人が居住していたのにもかかわらず、個人の生活の履歴がほとんど見えてこないことに気づく。

表－2 北野異人館の概要（ガイドブックに掲載されている公開異人館および公開施設）

名 称	概 要 (建築時期、旧居住者、活用方法、文化財指定、入館料、その他)
イタリア館 (プラトン装飾美術館)	明治末期。イタリアを中心としたヨーロッパの絵画、彫刻、家具、調度品などを集めた装飾美術館。喫茶、パーティースペースにも。執事スタイルのガイドの案内で見学。入館料700円。
ウィーン・オーストリアの家	1992(平成4)年。モーツァルトの生家に見立ててオーストリアの文化などを紹介するテーマ館。ロココ調の衣装やモーツァルトが作曲に使用したピアノの複製品、楽譜を展示。入館料500円。
うるこの家・うるこ美術館	1905(明治38)年。外国人の高級借家として居留地に建てられ、明治後期に北野に移築。アンティーク家具や古マイセンなどのコレクションを公開。入館料1000円。
英国館	1907(明治40)年。コロニアルスタイルの異人館。英国人医師の在住当時のままに保存。バロック時代やビクトリア時代のアンティーク家具や調度品を展示、庭にはエリザベス女王愛用のダイヤモンドのリムジン。マントを羽織って記念撮影ができる。夜はバー「King of Kings」になる。入館料700円。
香りの家オランダ館	1918(大正7)年。元オランダ総領事が3代にわたって暮らした邸宅。オリジナルの香水を調合。1階にある150年前のオランダ製の自動演奏ピアノが珍しい。オランダの民族衣装のレンタル、記念撮影(1000円)。入館料700円。
風見鶏の館	1909(明治42)年。ドイツ人貿易商G・トーマス氏の私邸として建築。レンガの外壁の異人館は現存する中で唯一。部屋には当時の流行であったアールヌーボーの意匠が凝らされている。国指定重要文化財。入館料300円。
北野外国人倶楽部	明治後期。開港当時の居留者の社交場、会員制倶楽部を再現。コロニアルスタイル建築。木彫り暖炉やマキ炭のキッチンなどが残されており、庭園には19世紀の馬車やミニ礼拝堂など。9館共通券を買うと無料でドレス試着体験可。入館料500円。
北野物語館	1907(明治40)年。阪神・淡路大震災で全壊、平成13年に復元され現在の場所に移築。現在はカフェとして公開。ケーキ500円～、コーヒー500円～、ランチセット1000円。
旧中国領事館	明治後期。西洋スタイルの異人館の中にあって漂うオリエンタルムードが新鮮。中国の明朝から清朝にいたる貴重な美術品や家具などを展示。入館料500円。
旧パナマ領事館	明治後期。南国ムードの洋館。当時のパナマ領事の執務室、食堂、寝室などがそのまま残る。内部には中南米のマヤ文明、アンデス文明の土器や土偶など、学術的にも価値ある展示物が並ぶ。入館料500円。
グラシアニ	1908(明治41)年。フランスの貿易商グラシアニ氏の旧邸宅をそのまま利用したフランス料理店。
神戸北野美術館	1898(明治31)年。旧アメリカ領事館を美術館に。兵庫県出身のイラストレーター永田萌の原画を中心に展示。グッズショップ、カフェも併設。入館料500円。
ザ・テディベアミュージアム	大正時代。旧シャラフディン邸。2004年アメリカンハウス(旧ハムウェイ邸)と合併し、リニューアルオープン。数cmから2.mのものまで、さまざまな種類のテディベアを展示。入館料500円。
シュウエケ邸	1896(明治29)年英国人技師ハンセルの私邸として建築。文明開化当時の錦絵を展示。現在もシュウエケ家の私邸として使われている現役の異人館。入館料500円。
デンマーク館	1992(平成4)年。デンマークにあるバイキングミュージアムやアンデルセンミュージアムの協力により、デンマークの歴史や文化を紹介。バイキング船のレプリカを展示。2階には童話作家アンデルセンの書斎を再現、愛用の机やベンが見られる。入館料500円。
東天閣	1894(明治27)年。旧ビショップ邸を利用した本格中国料理の店。風格ある外観、中国風の調度品など、オリエンタルな雰囲気なかで中国王宮料理が楽しめる。
パラスティン邸	明治末期。ロシアの貿易商の自邸として建設。喫茶兼パーティースペースとして開放。手作りケーキセット750円。サンドイッチ800円。
仏蘭西館(洋館長屋)	1904(明治37)年。居留地から北野に移築。内部にはルイ・ヴィトンの初期のトランクや、アールヌーボーの花形作家ガレ、ドーム兄弟の作品などを展示。入館料500円。
ベンの家	1902(明治35)年。イギリスの冒険家、ベン・アリソンの邸宅。世界中を旅して捕った動物の剥製を展示。動物をモチーフにしたステンドグラスも見事。入館料500円。
本家オランダ館	明治時代。オランダの貿易商チャーリー・エリオンの私邸として建築。オランダ民族衣装が無料体験できるほか、有料でウエディングドレスの貸し出しも。入館料500円。

名 称	概 要 (建築時期、旧居住者、活用方法、文化財指定、入館料、その他)
萌黄の館	1903(明治36)年。アメリカ総領事H・シャープの邸宅だった異人館。左右異なるベイウィンドーや緑の外壁に赤の煙突など、斬新なデザイン。見どころは一階の開放型ベランダと玄関。さながら西部劇に出てくるセット。国指定重要文化財。入館料300円。
山手八番館	明治後期。チューダー式の三連式の塔屋を持つ異人館。館内にはロダンや、ブールデル、ベルナルの三大巨匠の作品のほか、ピカソに影響を与えたマコンデ彫刻など世界の彫刻美術を展示。入館料500円。
ラインの館	1915(大正4)年。旧ドレウエル邸。ベイウィンドーなど明治期の異人館様式を受け継いだ造り。唯一の無料開放の公開異人館で、2階は異人館に関する資料を展示。入館無料。

注記) 以下の文献に基づいて作成。

- 『マップルマガジン 神戸』 昭文社、2004年。
- 『るるぶ 神戸 六甲 有馬』 JTB、2004年。
- 『たびまる 神戸』 昭文社、2004年。
- 『上撰の旅 神戸』 昭文社、2003年。
- 『たびんぐ 神戸・大阪』 山と溪谷社、2006年。

こうした実情と照らしてみても、興味深い記述がかつてのガイドブックにみられる。1972年に発行された『NOW神戸』では、北野の解説部分のある頁の上半分は異人館街に住んでいる外国人の子どもの笑顔が大写真で載せられ、臨場感を生んでいる。そして異人館の説明に各建物の居住者が登場し、時に実在の人物が固有名詞で語られる。たとえばこんなふうのだ。

旧グッゲンハイム邸の南向いには、緑色の異人館があって、サリーを着た女の人が出てきました。その隣のはげたピンク色みたいな異人館は、骨董品をいっぱい持っている、とてもカッコいいデザイン・オフィスなのです。写真のスタジオもあって若い男性10人ぐらいが働いています [「神戸っ子」編集室1972:10]。

その西は、白い洋館が多く、明るい陽射しと、ベランダと観葉植物と猫と犬と…。大きな楠の葉かげから青い屋根と赤いレンガの煙突が印象的な白い異人館は、旧メイ・アデレイド・シャープ邸。とても優雅なお家で、小林秀雄さんというイキなおじさまがとっても優雅に暮らしておられます [「神戸っ子」編集室1972:11]。

もちろん、こうした語りや情緒的な場面の描写の底に、ある種の演出を感じないわけではない。しかし、少なくとも、現在の公開異人館やガイドブックからは消失してしまった、実定性を帯びた街の生活の匂いを感じとることができよう。

たしかに、異人館では当時の部屋や調度類を保存して、展示している場合は多いが、そこに固有の人物が暮らしていた有様を説明するような資料提示がなされていることはほとんどない。また、住んでいた人の出身国にちなんで展示がされている例も多いが、家屋の造りや実際に用いられた生活用具によってイギリス風、フランス風、オランダ風等の特徴を示しているわけではない。むしろ後から持ち込んだ、各国の歴史、文化のステレオタイプ的な展示が目立つ。その意味では万博のパビリオンの発想に通じるものがある。

こうした現象の背後には、伝統的建造物として指定を受け、公開するということが、基本的には私生活を排除するという構造があるだろう。異人館が公開の歴史的な建造物として社会的、制度的に認知された以上、個人の生活の場であることの意味ではなく、その地域における特定の時代の建造物の典型を示すことが担うべき主な役割であり、固有名詞を明示する遺物は取り除かれてしかるべきだということになる。

だが、個人の生活史の捨象が意味するものはそれだけではない。家が家として住まれてきた個別、具体的な経験の累積を消去して、そうした実定的な根拠をもたない、抽象的な「外交官」や「貿易商」の家として描き直すことは、観光上の演出にとって好都合なのである。これがもし有名な作家や芸術家の生家あるいは仕事場となった住宅を見るのであれば、固有名詞は観光対象化の鍵であるが、その場合は、単なる固有名詞ではなく、ゆかりのある人物の有名性こそが必要となる。しかし、異人館では近代神戸の外国人居住の名残を示す、エキゾチックな雰囲気こそが対象化される鍵になっている。個々の私人の生活の匂いはさほどの重要性を帯びず、むしろ過剰なものとして違和感を生み出すのではなかろうか⁵⁾。

4. 若干の考察

伝統的建造物群がかくも観光に侵食されて、本物も偽物も渾然一体となった、ポストモダン的な空間を生み出すようになったのか。伝建という文化遺産の文脈よりも観光対象の文脈が優位に立ったのはなぜだろうか。

大きな理由のひとつは伝建制度そのもののもつ構造的な性格にあるだろう。基本的に近世以前の建造物を単体で、凍結的に保存してきた旧来の文化財保護法の主旨では、近代以降の商家、民家等で構成する街並みを集合的に保存することは難しい。このため、伝統的建造物群保存地区の制度は、外観をできるだけ維持して街並み景観を保つこと、そのため、建物内部は現代的な利用に耐えるよう改修すること(再生)を認め、新しい用途も導入して使い続けること(活用)で建物を保存していこうとする動的な保存の考えに立っていた。活用の仕方については本稿でみてきたように多様な内容がありうる。もともと、伝建の制度自体が観光利用を排除しないどころか、むしろ保存のための有力な方法として前提していたとさえいえる。また、実際の伝建地区の成立過程は、観光の進展と表裏をなしていた。1970年代のディスカバー・ジャパンのキャンペーンやアンノン族の流行は、倉敷、萩、高山、妻籠等の歴史的街並みへの注目を促し、これらの地域を一躍、観光地として知らしめることにもなった。伝建地区指定には、北野異人館もそうであったように、急激に進行する観光地化への対処としての意味合いがあったわけだが、観光そのものを抑制するというものではなかった。それは先に述べたように、伝建自体が観光を内包する構造になっているからである(その意味では観光との関係をどう保つかを、伝建の担い手は常に考え続けなければならない)。

このような伝建一般がもっている性格に加えて、北野固有の要素が考えられる。近代以降の各年代の和風建築との混在が、北野の伝建の特徴とされ、この地域には一元的、統一的な景観形成は馴染まないのである。これは近世以降の町屋を基調とし、現代建築の概観もそれに合わせて修景することで統一的な景観を形成していこうする多くの伝建地区とは趣を異にする。『異人館のある町 北野・山本』においても、伝建地区を含む都市景観形成地区を設定したことについて、「この地区は、異人達が日本文化の中へいわば異物を持ちこんだことから形づくられたもので、将来的にも変化を拒否するものではなく、むしろ歴史のうねりの中での変化そのものが、このまちの文化であるという認識に立っている」〔神戸市教育委員会 2000: 76〕と述べられている。仮にこの地域に変化を許容するこうした姿勢が共通してみられたのであれば、観光化にも寛容(少なくとも当初は)であっただろう。

また、見落とせない点は、異人館街の構成が観光に適合的であったということである。つまり、各建造物は当時の住人や建築家の意向で、それぞれに意匠を凝らした個性的なものも多く、一口に異人館と言っても

外観上はかなりの差異を生んでいる。このため、各建造物が、異なるアトラクションとして機能することを可能にしているし、それらに各国の記号が付与されることで差異を強調することができるのである。

ところで、北野の公開異人館の大半は有料施設となっており、さらにそのなかで飲食、物販、体験アトラクションが有料で提供されている。こうした状況は、空間そのものの商品化として捉えることができるだろう。近代文化遺産の観光対象化を大きく捉えるならば、現在も進行する都市空間の構造的な変容と密接にかかわりあっている。旧都心のビジネス街や生産・物流基地である地域が機能低下をきたし、従来の建築、構造物が陳腐化、不要化するなかで、それらは移転や用途転換を迫られ、商業(小売)、文化、芸術、娯楽ならびにそれらと重なり合う観光への機能転換が進んだ。こうした都市空間の生産活動から消費サービス提供への機能転換は、資本主義経済における産業構造の高度化という大きな変化の一部である。しかし、それは土地を擬制資本化するというだけでなく、それらのサービスを提供するために空間そのものに諸々のイメージや記号を付与して演出を施し、商品化せざるをえないことを意味する。つまり、資本が都市空間への投資を持続するためには、空間になんらかの具体的な形象を付与する必要がある。そして、近代文化遺産はそれ自体が記号に浸された空間の消費に利用されると同時に、物販、娯楽、体験アトラクション等の入れ物として格好の素材となりうるのである⁶⁾。北野異人館での現象もこのような背景のなかに捉えなおすことができよう。また、先にみたように異人館の空間の商品化は、その具体的な姿と不可分であり、文化遺産の表象のありようにも深く影響を及ぼしているだろう。

現実の北野異人館の活用において、公開された洋館群はエキゾチックな雰囲気をかもし出す、観光向けのグッズやアトラクションの入れ物としての役割を果たしている。たしかに、実在する伝統的建造物は権威づけられたレファレンス(参照の対象)として、内部の利用方法に一定の制約を加える重石の役割を果たしているだろう。しかし、その参照のされ方は観光特有のものである。開港による諸外国文化の導入、とくに西洋近代文化の移植という歴史的事実から、“異国情緒”“おしゃれ”“レトロ”といった特定のイメージが抽出され、誇張・加工されて、再び目に見える具体的な形として現されたのが今ある異人館の姿ではあるまいか。

観光の文脈やまなざしは、文化遺産(ここでは伝統的建造物)として認定された希少な本物を排除せず、観光対象化の足がかりにしながらも、イメージや記号に満たされた別次元の演出的な空間を創り上げてきた。いわば不協和音を奏でる、この二つの文脈のなかに、北野異人館は構築され続けていくことになるだろう。

[注]

- 1) 観光スポットの呼び名として一般化している「北野・異人館」は、伝統的建造物群保存地区としてみる場合、「北野町山本通」という地域の捉え方になる。あるいは①のタイトルのように「北野・山本」と併記する形で述べられる。しかし、観光のメディアでは、観光スポットとしての呼称に「北野」は欠かせないものの、「山本」はほとんど見ることがない。山本通りは別名、異人館通りとも呼ばれるので、一見すると「北野・山本」が「北野・異人館」と読み替えられたようにもみえる。しかし、ガイドブックの異人館は北野に多く集中する公開異人館を実際には指し示しており、山本地区ないし山本通りを意味しているわけではない。また、山本通りは公開異人館がほとんどなく、ガイドブックで取り上げられる場合は、むしろ、レストラン、ショップの紹介が記事の大部分を占める。このように、北野異人館と呼ばれる空間の範囲に関しても、伝統的建造物と観光対象の二つの視線において、微妙な食い違いをみることができる。
- 2) 山下晋司は、自身のバリにおける伝統文化の当初の調査を振り返って、写真を撮る場合はカメラのファインダーから観光客を注意深く除いていたという。人類学者が研究にとって観光客を目障りな存在として排除する視線にも、伝統文化を現在の観光という文化的影響から切り離して捉えようとする姿勢がうかがえる〔山下1999: 36〕

9]。

- 3) 補足的に言うならば、③④のガイドブックが和風建築の伝統的建造物(計7棟)を全く取り上げていないことも北野イコール異人館という観光の視線とかかわりあっているだろう。「北野異人館」の紹介であれば当然なことだが、ガイドブック全体を通していても、和風建築の伝統的建造物は登場してこない。それらは洋風の建造物と並んで、同じく歴史的な街並みを形成している文化財としての評価を受けていようと、観光の領域においては全く評価が異なることを示している。
- 4) 「香りの家オランダ館」での聞き取り(2005年4月)。
- 5) たしかに、シュウエケ邸、パラストイン邸といった、旧住民の氏名が前面に押し出される場合もある。しかし、観光者にとっては、シュウエケやパラストインでなくてもよいわけで、要は、外国人が居住していたことの記号としてカタカナで表記されることの意味合いが大きいと思われる。
- 6) 空間そのものの商品化は都市に限らず、現代の日本全般を覆う変化ではあるが、それは大量集客の可能性をもち、資本の高密度の回転を要する都市の空間に著しく現れるし、また、文化遺産化する近代の建造物の質、量も都市において優位である。

[参考文献]

- 遠藤英樹 2003 「観光のオーセンティシティをめぐる社会理論の展開」 山上徹・堀野正人編著 『現代観光へのアプローチ』 白桃書房。
- 2003 「神戸における「風景の政治学」」 『アジア遊学』 No.51、勉誠出版。
- フェザーストーン・マイク (川崎賢一・小川葉子編著訳) 2003 『消費文化とポストモダニズム』 恒星社厚生閣。
[Mike Featherstone, *Consumer Culture & Postmodernism*, SAGE Publications, 1991]。
- 福田珠己 1996 「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動—」 『地理学評論』 vol.69, No.9。
- ハーヴェイ・デヴィット(吉原直樹監訳) 1999 『ポストモダニティの条件』 青木書店 [David Harvey, *The Condition of Postmodernity*, Oxford: Basil Blackwell, 1st edition, 1989.]。
- 堀野正人 2002 「イメージとしての『港町横浜』と観光」 『日本港湾経済学会年報』 No.40。
- 2005 「『港』の記号と観光の都市空間」 『日本港湾経済学会年報』 No.43。
- 北田暁大 2002 『広告都市・東京 その誕生と死』 廣済堂出版。
- 荻野昌弘 2002 「文化遺産への社会学的アプローチ」 荻野昌弘他編 『文化遺産の社会学』 新曜社。
- 大橋健一 2004 「観光のまなざしと現代チャイナタウンの再構築」 遠藤英樹・堀野正人編著 『「観光のまなざし」の転回』 春風社。
- アーリ・ジョン (加太宏邦訳) 1995 『観光のまなざし』 法政大学出版局。
- 山下晋司 1999 『バリ 観光人類学のレッスン』 東京大学出版会。

[参考資料]

- あるつく社編集部 1991 『たびんぐ 神戸・大阪』 山と溪谷社。
- あるつく社編集部 2006 『たびんぐ 神戸・大阪』 山と溪谷社。
- 株K&Bパブリッシャーズ 2004 『神戸ベストガイド』 成美堂出版。
- ブルーガイド編集部 2006 『ブルーガイド プチ贅沢な旅 神戸』 実業之日本社。
- ブルーガイドニッポン編集部 2002 『ブルーガイドニッポン 神戸・淡路島』 実業之日本社。
- 広瀬安美 1977 『神戸異人館』 保育社。

JTBパブリッシング関西編集部 2004 『i ジャパン 神戸』JTBパブリッシング。
JTBパブリッシング企画出版部 2006 『タビリエ 神戸』JTBパブリッシング。
「神戸っ子」編集室 1972 『NOW神戸』ベストセラーズ。
神戸市教育委員会編 2000 『異人館のある街並み 北野・山本』神戸市教育委員会。
神戸市教育委員会編 1990 『神戸の近代洋風建築』神戸市。
タイムスペース 1986 『エリアガイド 神戸』昭文社。
らいむず企画 2003 『上撰の旅 神戸』昭文社。
らいむず企画 2004 『マッフルマガジン 神戸』昭文社。
らいむず企画 2004 『たびまる 神戸』昭文社。
らいむず企画 2004 『につぼんの旅 大阪・神戸』昭文社。
るるぶ社国内編集部 2004 『るるぶ 神戸 六甲 有馬』JTB。